

すべては本当の「自分の心」を汲み取ることから



杉坂恵子

京都大学学術研究支援室
[606-8501] 京都市左京区吉田本町 総合研究2号
館321号室
リサーチアドミニストレーター、
専門は細胞生物学。
sugisaka@kura.kyoto-u.ac.jp

www.kura.kyoto-u.ac.jp/

今春、12年勤めた理系出版社を辞め、リサーチ・アドミニストレーター (University Research Administrator ; URA) という仕事に就いた。

は？「URA」って何……？と、首を傾げた方もおられるだろう。欧米の大学では一般的な存在だが、日本では導入され始めてから日が浅いこともあって、認知度（および社会的評価）は低い。名前は知っていても職務内容を誤解しているケースも稀ではない。

個々の大学によってURAの職務は異なるが簡単に言えば、大学研究者が研究と教育に専念できる環境をつくるため、研究者に寄り添って研究活動のサポートをするというものだ。研究費申請やプロジェクト運営、アウトリーチ活動に際して、情報や知識を提供したり、実際に手を動かして支援する。求められる知識やスキルも、日々の作業も、前職とはだいぶ異なる。

私の転職を知り、聞き慣れない（得体の知れない）異業種で新人としてゼロ出発することに、驚き呆れている知人は多い。「チャレンジャーだね」「安定した立場を棒に振って、もったいない」との声も聞いた。私にとっても前職は充実していたので、自分でも「ちょっと魔が差した？」と感じなくはない。

しかし今、刺激的な毎日である。これまで接する機会がなかった多様な業種、学問分野、年齢の人たちとの出会い、降り注いでくる初耳の情報や知識、そして何より、新しい業種を確立させようという情熱、気概、活力に溢れた同僚たち。この転職は大正解だったと、心底、感じている。URAの活動の場は今後少しずつ増えていくであろうし、むしろ増えていくかどうかは、私たち現役URAの頑張り次第だという点も、やる気を奮い立たせてくれる。

だから今、もし将来のキャリアパスに迷っている人から相談を受けたなら、自信をもって言える。「世間の評価に束縛されないこと、自分の潜在的願望に気づき、それに応えようとするのが大切」と。

海外事情は知らないが、この日本という国では、世間一般のステレオタイプな「幸せ」を、人に、そして自分自身にも無意識的に強いる空気がまだまだ強いように感じる。しかし何が「幸せ」かは、個々人で大きく異なる。家族や恩師、友人がいろいろなアドバイスを

くれるだろうが、まずは何より、自分が将来（たとえば60、70歳になったとき）どんな風になっていたか、潜在意識から汲み上げてほしい。これは案外と難しく、親や友人など周囲の評価が気になったり、世間一般の価値観にまどわされやすい。それを意識的に抑え込み、その陰に隠れた自分の心の声に光を当てる。その結果、私の場合は「何歳になっても、自信と誇りをもって働いていたい」「自分なりのかたちで日本のサイエンスに貢献したい」というのが、揺るぎない願望だとわかった。それを実現するには、研究者である必要はない。むしろ生来のミーハー精神を活かして、卓越した研究や元気な研究者をあれこれ社会に発信することで、ますますサイエンスを輝かせられると思い、理系編集者になった。そして今回、もっと直接的かつ多角的に研究者をサポートできるURAという仕事に出合ったので、飛び込んでみた。ここで得られる知識やスキルは、60、70歳になっても社会やサイエンスに貢献できるに違いない。誰がなんと言おうと、私の「幸せ」に向けた大きな前進だ。

自分が「幸せ」と感じることに自信をもつ。自分の「幸せ」に正直になる。諸先輩方は、これを自然体で行ったり経験的に体得してこられ、わざわざ書き伝えるまでもないとお感じかもしれない。しかし、小心者で他人の評価を気にしながら育ってきた女子が、社会にでて十数年悩み揉まれつつ気づき、ようやく確信した人生訓だったので、若い方々に伝えたいと思った次第である（ちょっとした自慢も込めて）。

ちなみに今、日曜日のお昼前。人様にお見せするような文章は書き慣れないため時間がかかり、朝食後からずっとPCにかじり付いている。書き終えたら、母とTVを見ながら昼食をとり、持ち帰ってきている仕事に取りかかる予定。このリレー連載のタイトルでもある「私事」も、趣味も、へったくれもない。他人の目には、さぞ華のない“残念な週末”だろう。でも、これが今の私には楽しい時間の過ごし方なのだから、私にとっては、これが「正解（幸せ）」なのだ。そう、ワークライフバランスや休日の過ごし方も、世間の風潮や他人の評価に合わせる必要はない。自分が「幸せ」であれば、それがその人の「正解」だ。